



医療の現場アラカルト - Vol.2

ポルトガル語担当 松下さん

小児科の通訳では、親御さんの子どもに対する思いの大きさ、強さを実感させられることがよくあります。患者さんの中には自分の診察日を忘れる方がたまにおられますが、私の経験上、親御さんが子どもの予約日を忘れて病院に現われなかったことはこれまで一度もありません。

引きこもりの10代の場合、母親の助けたいという強い思いから、成育歴や状況確認の説明が延々と続きます。メモをとるのが大変で、途中で「ここまでで止めてもらえますか」とお願いすることが何度もありました。また、お子さんの発達障害で定期的に精神科に通う中で、徐々に子どもができることが増え、主治医と母親の嬉しい気持ちを私の方までおすそ分けしてもらうこともあります。

一方、呼吸器に問題のある幼児のケースでは、他院で通訳者の手配がままならずコミュニケーション不足で医療スタッフから誤解を受け、伝えたいことがあっても聞いてもらえないため子どもの処置がうまくいかずに一時的に意識を失うこともあったとのこと、その時の悲しい、悔しい思いがこちらまで伝わりました。



骨髄移植を受ける予定の幼児の通訳では、骨髄移植の前処置として受ける放射線照射の機器の材質は何かと両親が質問し、説明した医師達も私も全く想定していない問いに戸惑ったことがありました。「将来も放射線の影響が及ぶ可能性があるので、より安全な方法を選びたい」と、国外も含む治療に関する情報を基に質問をされていました。

いずれのケースも、子どもさんはもちろんですが、親御さんの考え、願いを十分理解することが大切だと実感します。



「トランスレーション」



アメリカ・テレビ界のアカデミー賞にあたる「第76回エミー賞®」で、「SHOGUN 将軍 (Disney+配信)」が作品賞はじめ18部門を獲得しましたね。本当の日本をドラマ化するための数々の努力があったと報じられましたが、その中に日本語のセリフを完璧にするため字幕を多用するという決断があって、「これはトランスレーション(翻訳)をめぐる番組だ」という感想があったそうです。

脚本は英語で書かれ、日本語に翻訳し、さらに字幕用の英訳を行ったということですが、これって通訳者が勉強のために行うのと同じだなと思いました。自分が外国語に翻訳したものを、再度機械翻訳にかけて元々の文章と比較します。また、ネイティブチェックを行うなどして、翻訳された文章が正しいだけでなく、「らしくなっているか」まで考えます。言葉は単に伝わればいいというものではありません、SHOGUNのを見せてくれたプロ意識に学びたいと思います。

今月のトピックス



「認知症」



先月の医療通訳勉強会のテーマは「認知症」でした。大学の附属病院でメンタルクリニックを専門とされる外部講師をお招きして、日本と世界の高齢化の比較や、主に日本とアメリカを比較した認知症の定義や現状についてお話いただきました。65歳以上の高齢者数が総人口に占める割合(高齢化率)が7%から14%に倍加する年数が、フランスが115年、アメリカ72年に対し日本はわずか24年です。急速な高齢化…と言葉では聞きますが、実際に数字やグラフで見せていただくと、厳しい現実が強く迫ってくるようでした。

日本では今年施行された「認知症基本法」に基づいて、9月21日、初めて「認知症の日」を迎えました。多くのメディアで関連した報道がありましたが、これは日本人だけの問題ではありません。勉強会の資料で見ると、昨年末で在日の外国人高齢者は22万人に上ります。認知症状が出始めると、外国人高齢者は「母国語、母国文化がえり」の傾向があると聞いたことがあります。認知症の治療だけでなく、周りの家族への支援含めて、私たち医療通訳者ができることは、この分野でも少なくないと思いました。

